

Title	ハンス・ベルメール作品における身体のイメージと交換可能性
Author(s)	松岡, 佳世
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/76326
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (松岡 佳世)	
論文題名	ハンス・ベルメール作品における身体のイメージと〈交換可能性〉
<p>論文内容の要旨</p> <p>本博士論文の目的は、人形制作以降も多様なメディアによって進められたハンス・ベルメール作品とその制作理論における身体のイメージの変化を一貫した視点から考察し、特にシュルレアリスム運動との関係においてその同時代的文脈の中に位置づけることである。</p> <p>ベルメール作品の身体のイメージについては、1990年代までのモノグラフィ研究を除けば、主に2000年代に精神分析的イメージ研究が盛んに行われた。しかしその分析対象は主に人形写真に留まっており、その後も継続された版画、デッサン、彫刻制作にまで一貫した説明を付すことができていない。人形及びその写真制作はその後の作家自身の制作にも多大な影響を与えた代表作であることは疑いようがない。しかしベルメールの経歴全体から見れば、それは1930年代の限られた数年間において行われたものであり、これを展開する形でその後30年以上に渡って制作されたベルメール作品を検討する必要がある。</p> <p>また、精神分析的な考察方法では制作の動機を作家の個人史、あるいは欲望や抑圧といった内的理由に求めるあまり、その歴史的な文脈、特に長年に渡り作家が身を置いたシュルレアリスムの文学的・造形的実践との関係には深い考察が加えられてこなかった。しかし、このような状況の元90年代末から進められてきた優れた研究、特に書簡、版画やデッサン等の紙媒体のまとまった資料的研究や展示は、そうした他作家との比較研究を可能にする調査成果を出している。よって本論文における考察・記述ではこれを反映し、同時代的な文脈、特にシュルレアリスムにおける文脈を重視する立場をとった。</p> <p>本論では考察の統一的視点として、ベルメールが球体関節人形の制作時から検討していた〈交換可能性〉という概念を取り上げた。ベルメールは1935年以降、身体のパーツを繋ぎ変え、各部位が「交換可能」な身体のイメージを持つ奇妙な球体関節人形を写真で提示するようになる。球体関節人形写真以降の造形活動において、この「交換可能」という表現は彫刻や晩年の版画やデッサンに至るまで、その適用範囲を拡大している。テキストに眼を移すと、二冊目の著書『人形の遊び』（1949）で解説された球体関節の理論的機構は「交換可能」な機能を持つものとされ、それは〈交換可能性〉として初めて言及された。そして最後の理論書『肉体的無意識の小解剖学、あるいはイマージュの解剖学』（1957、以下『解剖学』）では、〈交換可能性〉はイメージが形成されるときに主体に働く力として記されている。よって執筆者は、ベルメールの造形実践における「交換可能」に関する表現と、理論における〈交換可能性〉を照らし合わせながらその変化を記述していくことで、作家が生涯取り組んだ身体イメージの変化の様態が明らかになるのではないかと考えた。</p> <p>本論文の見取り図を述べる。第一部では、初期人形から球体関節人形までの変化を人形・写真・テキストという3つのレベルから分析し、これを受けた〈交換可能性〉の理論化との関係を記述した。I章で取り上げた初期人形の写真は、作家を魅了した「少女」の世界の代替物である人形の複製であり、制作の記録手段であった。しかし球体関節の導入によって「交換可能」な身体を持った第二期の人形には、写真の背景が不可欠なものとなり、シリーズ化した。人形身体の変容性は、球体関節だけではなく写真を「見る」という段階によって補強された。理論化の段階でこの人形と写真の関係を検討することにより、ベルメールは球体関節の身体部位を「交換可能」にするという機能を、〈交換可能性〉として、人形とその周囲の世界にまで拡張している。</p> <p>II章では『人形の遊び』で球体関節の理論的根拠として取り上げられた、マルセル・デュシャンの《ロト・レリーフ》解釈作業を考察した。《ロト・レリーフ》は回転運動による立体効果という、鑑賞者に「不完全」な「偽知覚」を与える作品であり、ベルメールもこれをテキストに利用した。これは、作家が作品を「見る」という立場を意識している点で、第二部からの「主体」の問題への関心を予感させる。さらに作家は《ロト・レリーフ》が、デュシャン晩年の「不完全さ」とエロティシズムの関係の探究という傾向を強く帯びた作品であることをいち早く認識していた。作家は《ロト・レリーフ》を「見る主体」の視線の「不完全さ」とエロティシズムを結びつけるものとして捉え、人</p>	

形写真の理論化を行っていたと考えられる。

第二部では、第一部で確認した〈交換可能性〉が、制作者自身のアイデンティティや性の「交換」、身体部位と外界のオブジェとの「交換」が行われる場へと拡大するプロセスを確認した。ここではベルメールの「交換」の表現あるいは〈交換可能性〉という思考に関わったシュルレアリストたちとの協働や比較検討が中心となり、球体関節人形以降の作品とテキストが、概ね時系列で分析される。I章では、『人形の遊び』執筆が完了する1938年以降から戦中までの造形実践を、主にマックス・エルンストとサルバドール・ダリという、二人の代表的なシュルレアリストたちの制作に対して向けられていた作家の視線に着目して考えた。1938年頃から油彩や彫刻作品に現れる頭足類の原型となる作品は、複数イメージの重ねあわせというダリの「偏執狂的=批判的」手法に接近していた。また、エルンストとの共作《創造、想像の生物》(1939)の頭足類では、この複数のイメージの重ねあわせの場という性格が作家自らのアイデンティティに振り向けられ、二人の作者を互いに「交換可能」にする表現へと接続された。主体が他者と「交換可能」なものになるというこの〈交換可能性〉の意味論的展開は、シャルル・ボードレー『人工天国』のためのデカルコマニー制作においても、自己の役割に積極的に解釈される対象との「交換可能」な性質を与えるというかたちで現れている。

II章では、収容所解放後潜伏していた南仏の詩人ジョー・ブスケとベルメール双方の書簡を照らし合わせることで、『解剖学』第二章「愛の解剖学」に見られる理論的協働のプロセスと、同書の挿画のもととなった南仏時代の作品群を再検討した。ベルメールは、自己身体を他者のなかで探求することによる「性の交換」への関心をブスケと共有したが、それは他者への完全な同化を目指すものではなかった。ベルメールは男女の身体イメージ全体を規定する身体部位それぞれにおいても「性の交換」を見出し、身体部位を重ね合わせて「交換」の可能性そのものを示す。自己の探究を進めるようになった作家は、その「交換」の対象に自身の欲望の対象(=女性)の身体イメージという項目を加え、特にその身体細部の間の「交換」表現を繰り返すようになる。

III章では、ジョルジュ・バタイユ『眼球譚』改稿版の挿画を再検討し、この制作がブスケとの理論面での協働作業とも平行しつつ、「交換」表象に変化を促したことを示した。挿画準備段階では、人形制作から引き続き探求された「写真的近さ」と「子ども」らしさという要素がバタイユにも共有され、繰り返される有用なオブジェの濫用に読者を着目させた。また『眼球譚』エスキス制作は、作家のサド関連制作と平行して進行していた。これによってバタイユの登場人物の身体のイメージはベルメールによってサドの登場人物の身体と混じり合い、破壊され、身体部位にとどまらず卵や便器、排泄物といったオブジェとも「交換可能」なものとなっていく。

第三部では、第二部まで見てきたような「交換」表現の対象の拡大を受けた〈交換可能性〉と制作主体の関係を検討し、またその過程で、主にシュルレアリスムとの関係においてベルメールの制作の位置を検討した。I章では、戦後のベルメールの制作とサドの著作との接近を軸に、その作品が戦後のシュルレアリスムグループに対する作家の批評的な視線を反映していたことを示した。以前の制作に立ち戻る機会に恵まれた作家は、戦後「第二のサドの季節」を迎えて取り組んだ制作で、球体関節人形の身体の「交換」、また『眼球譚』における記号的「交換」を増殖させながら「快楽」と「苦痛」という内的エネルギーに囚われた身体イメージを描いていた。この反抗的身体とも呼べるものは、ベルメールの身体イメージとサドのエクリチュールを貫く唯物論的思考をもつ表現であった。戦後シュルレアリスムグループの神秘主義的傾向、そしてそれに伴う芸術作品と倫理や社会規範の結びつきを憂慮していた作家にとって、「快楽」や「苦痛」という内的エネルギーに突き動かされた身体のイメージを投げ出し続けることは、自らの作品をサドのそれに重ねながら、その傾向に「反抗」するための手段でもあった。

II章では、「交換可能」という身体のイメージ表現を通じて重要性を帯びた制作主体が、最後のテキスト『解剖学』においてどのように理論化されているのかを確認し、それによって作家とシュルレアリスムの「近さ」がどこにあるのかを明らかにした。ベルメールは『解剖学』執筆の際、神経心理学者ジャン・レルミットや精神医学者ポール・シルダーらの「身体イメージ」論をうけて主体の身体と外界の連関についての考察を深めた。アンリ・ベルクソン『物質と記憶』では主体と外界の二項対立を解消する知覚システムを参照するが、作家は対象の有用な再認メカニズムに関するベルクソンの理論を独自に変形させ、誤った再認、すなわち二つのイメージの非合理的な同一性を認めてしまう主体の「偽知覚」に想像力を見出す。また、ベルメールはここでその際の主体のあり方に着目した。身体内部のエネルギーを表現する身体と、主体の「直観」や「記憶」が出会い、「交換」されるのである。このような瞬間を観察することで生まれる身体のイメージを、ベルメールは唯物論的思考と「非合理」の境界を超えるものとし、身体のイメージ生成とシュルレアリスムを架橋している。球体関節人形における身体部位の〈交換可能性〉は、ここにおいてイメージ形成の際の制作主体のあり方にまで拡大されている。レルミットやシルダーらの「身体イメージ」やベルクソン哲学によって自らの〈交換可能性〉と30年代のシュルレアリスム理論を見直すことにより、ベルメールは自分自身の「身体イメージ」の理論を構築することができたのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (松 岡 佳 世)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 准教授 田 中 均
	副 査 大阪大学 教授 園 府 寺 司
	副 査 大阪大学 教授 高 安 啓 介
	副 査 九州大学 准教授 石 井 祐 子
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ハンス・ベルメール作品における身体のイメージと〈交換可能性〉

学位申請者 松岡 佳世

論文審査担当者

主査 大阪大学准教授 田中 均
副査 大阪大学教授 関 府 寺 司
副査 大阪大学教授 高 安 啓 介
副査 九州大学准教授 石 井 祐 子

【論文内容の要旨】

本論文は、ハンス・ベルメール（1902-1975）の作品と制作理論における身体のイメージの変化について、シュルレアリスム運動との関係を明らかにしつつ、彼自身の用語である「交換可能性」を手がかりとして、一貫した視点から考察するものである。学位申請者が従来のベルメール研究に見いだした問題点は、分析対象という点で1930年代の人形写真に限定されていること、また、分析手法としては精神分析的イメージ研究にとどまっていることである。これをふまえて学位申請者は、「交換可能性」の概念がベルメールの著作において、球体関節人形の機構の理論に発して、主体と外界のあいだのイメージ形成の作用へと拡張されたことに着目し、この概念が、人形写真から晩年の版画やデッサンに至るまで、彼の造形実践の原理であるとともに、シュルレアリスムの文学的・造形的実践との交流のあり方をも規定するという作業仮説を立て、作品と著作の分析を通じてその妥当性を立証しようとした。

本論文第一部第Ⅰ章では、ベルメールの初期人形が、彼を魅了した少女の代替であるのに対して、その後の、部位が交換可能な球体関節人形では、人形と外界との関係を写真に捉えることが主題となっていると指摘された。第Ⅱ章では、ベルメールが著書『人形の遊び』において球体関節の理論との関連でマルセル・デュシャンの《ロト・レリーフ》を取り上げていることが注目された。《ロト・レリーフ》によって喚起される「偽知覚」は、後のベルメールによって、見る主体の「不完全さ」とエロティシズムの問題へ展開されたとの解釈が提示された。

第二部では、「交換可能性」が、制作者のアイデンティティや性の交換、身体部位と外界のオブジェとの交換へと拡張される過程がたどられる。第Ⅰ章では、とりわけマックス・エルンストとの共同制作が取り上げられ、両者の手法の交換を、主体と他者との「交換可能性」として捉える議論が展開された。第Ⅱ章では、詩人ジョー・ブスケとの往復書簡のなかで、ベルメールは「性の交換」の理念を共有しつつも、男女の身体部位の交換への独自の関心を深め、創作の中で具現化したことが指摘された。第Ⅲ章では、ジョルジュ・バタイユの『眼球譚』のための挿画の制作過程が分析された。そこには、ベルメールが当時平行して取り組んでいたサドに関連する制作の影響が見られ、登場人物の身体イメージはオブジェとも交換可能なものとなっていると論じられた。

第三部では、制作する主体との関係における「交換可能性」について、シュルレアリスムとのかかわりのなか

で検討された。第Ⅰ章では、第二次世界大戦後の「第2のサドの季節」と呼ばれるサド再評価の機運のなかで、ベルメールがサドとも共有する唯物論的な思考にもとづいて、シュルレアリスムグループの神秘主義的傾向や芸術の道徳的な評価を批判したことが指摘された。第Ⅱ章では、ベルメールの最後のテキスト『解剖学』のなかでの「交換可能性」について検討された。ベルメールは神経心理学者ジャン・レルミットや精神医学者ポール・シルダーの「身体イメージ」論を参照しつつ、ベルクソンの『物質と記憶』における知覚システムの理論を独自に組み替えて、2つのイメージの非合理的な同一性を認める「偽知覚」の理論を形成したのである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ベルメールの制作活動を全体的に視野に収め、彼の制作が著作へと理論化され、理論がさらなる制作を促すダイナミズムを、同時代の文学・美術との交流の中で描き出した、意欲的な論考である。とりわけ、彼の「交換可能性」の理論と実践に、サドと共通する唯物論的傾向を見だし、これを戦後のシュルレアリスムの神秘主義・道徳主義と一線を画すベルメールの独自性として指摘したことは注目に値する。

ただし、本論文にはさらなる改善が望まれるところも少なくない。ベルメールにおける「性の交換」の枠組みがあくまで異性愛的なものにとどまっていることについては、現代的な視点から批判的な考察が加えられてしかるべきである。また、ベルメールの多様な制作活動に一貫した視座を与えるため、多くの作品に言及した反面、個々の作品について、制作技法やメディウムの特性について議論が尽くされたとは言いがたい。デュシャンの「偽知覚」の理論をベルメールのその先取りとみなす議論には一定の留保が必要である。また、ベルメールの著作の分析については、より一層の厳密な読解が望まれる。さらに、制作主体の側に注目するあまり、ベルメール作品の同時代の受容者について、市場のあり方を含めて考察が及んでいない点も指摘すべきであろう。とはいえ、これらの指摘は、本論文の学術的な価値を決定的に損なうものではない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。